

## 「ロベール・カエン」展 福岡市美術館

### ビデオ・インスタレーション

福岡市美術館で行われる「ロベール・カエン展」のプログラム詳細です(サンドラ・リシーとロベール・カエンのテキストをもとに作成)。

### 「絵葉書」

ビデオ・インスタレーション、1984年・1986年、S. Huter と A. Longuet の共同制作

時を切り取ったような古い絵葉書。ふいにイメージに命が吹き込まれる。一瞬の動きと音。そして消えていく。切り取られたイメージといきいきと動き出すイメージを対比させながら、ロベール・カエンは様々な方法で世界各国の絵葉書に命を与え、見るものを旅へと誘います。

### 「7つのビジョン」

7つの木箱(5分間の映像)、ビデオ・インスタレーション、1997年、FRAC / Alsace 所蔵作品

窓がついた7つの木箱が目の高さにあり、中を覗くことができる。それぞれの木箱の中では、中国で撮影された作品「7つの短い光景」が流れている。これらの木箱は遠く離れた風景をみる望遠鏡を象徴しているとも言えよう。もしくは、テープにのみ残るこの映像の記憶を留める「棺」ともなりえるのではないだろうか……

### 「聖骸布」

25分(ループ作品)、ビデオ・インスタレーション、1997年、FRAC / Alsace 所蔵作品

一枚の漂う布の両面に、2台のビデオ・プロジェクターによってまったく同じ映像が映写される。かすかに映し出されるたくさんの雨粒の中から、クローズアップされた顔が徐々に浮かび上がってくる。それらの顔は微動だにせず、不安そうだ。それから徐々にまぶたが動き始め、やがて消えていく。床には白い小石が敷き詰められ、観客は作品を見ながらその上を歩く。小石を踏むことによって生まれる感覚や作品の音を体感することで、カエンの作品を読み解くテーマの一つ「通過・移行 Passage」(生から死への移行、「映像」から観客に蓄積されていくその映像の「記憶」への移行など)を実体験するのである。

### 「Tombe (落下／墓)」

23分(ループ作品)、ビデオ・インスタレーション、1997年、FRAC / Alsace 所蔵作品

アクアブルーの画面の中に様々なものが現れる。女性の体、日用品、おもちゃ、白いシーツ……これらは無重力状態のように上から下へ、あたかも液体の中を動いているかのようにゆっくり動いており、観客はビデオ・アーティストが普通あまり使わない「静寂」の空間に誘われる。そしてそこに現れる物に名前をつけていく、いわば「意味的空間」と、それら「物」が思い出やアナロジー、組み合わせなどを呼び起こし、想像がかき立てられる「記憶の空間」を共有することになる。この作品のなかで、ロベール・カエンのテーマである、通過、欠如、記憶、流れる時間、記憶の場といった要素を見ることができる。

## 「Tombe（落下／墓）言葉とともに」

18分（ループ作品）、ビデオ・インスタレーション、2000年、特殊効果：Patrick Zanoli、エヴリーヌ・カニユスギャラリー、スイス・バーゼル州

ロベール・カエンの作品では、言葉は使用されないか、されてもごくわずか、もしくは音楽とともに使用される。この作品では、言葉を上から下へとゆっくりと移動させるという手法をとっている。「自由 *liberté*」、「人間 *être*」、「生きる *vivre*」といった言葉たちが、「伝記」や「自伝」といった言葉を思い起こさせる言葉（「父親 *père*」、「私の子供 *mon enfant*」、「ユダヤ人 *juif*」）や、カエン作品の重要なテーマである「旅行」を想起させる言葉（「出発する *partir*」、「機関車 *locomotive*」）、もしくはカエンの作品スタイルに見られる特徴を表す言葉（ゆっくりと「*lentement*」、「時間 *le temps*」、「通過・移行 *passage*」）などとまじりあっていく。

## 「通過」

30分の映像（ループ作品）、ビデオ・インスタレーション、2002年、特殊効果：Patrick Zanoli、ストラスブール近現代美術館所蔵（協力：ル・フレノワ国立現代アートスタジオ、CICV（国際ビデオ制作センター）ピエール・シェフェール、ZKM（アート・メディアテクノロジーセンター、ドイツ・カールスルーエ）、エヴリーヌ・カニユスギャラリー、スイス・バーゼル州、アルザス文化省）

このビデオ・インスタレーションは、縦長で枠がつけられた布に映写される映像作品で、あたかも絵画のようである。布の奥から人物が現れてくるが、彼らは濃い霧のようなもので隠されており、判別できない。それらの人物は一人ずつ、時にはグループで現れ、映像の端までゆっくりと進んでいく。霧が人物を包み、隠し、そして現れていく。白が支配する世界。子供、男性、女性たちが続けざまに現れるが、彼らの歩みはゆっくりとしていて、抑制されている。誰一人として自分たちを取り巻く霧から抜け出すことが出来ず、最後には布全体を覆うこの白い物質によって「食べられ」、「捕えられる」のだ。人間たちは「時間」という概念が試される空間にゆっくりと出現し、通過していく。

## 「冬の景色」

21分（ループ作品）、ビデオ・インスタレーション、2005年、モンタージュ：Thierry Maury、制作：Boulevard des Production（フランス・ストラスブール）、スイス・バーゼル州所蔵作品

2ヶ所の隣り合う壁に同じイメージが時間をずらして流されている。この作品は、南極大陸を題材にした「冬の旅」（1993）を再構築したものである。カエンは作品中の時間を中断することで、この大陸の景色を個人的なものとして捉えさせる。景色がゆっくりと移り変わらな、テーマとなるのは「視覚的な記憶」である。テーマはまた作品中で使用される「白色」が映像にリズムをつけることで、観客に徐々に「時間」の概念を呼び戻させる。

## 「極圏」

13分（ループ作品）、ビデオ・インスタレーション、2005年、無音、モンタージュ：Thierry Maury、制作：Boulevard des Productions（フランス・ストラスブール）

「こちら側」から「あちら側」への通過点。人間が定住できる最北の地であり、同時に未知の世界に対するの不安が始まる地、スヴァールバル（北極海からバレンツ海にまたがるノルウェー領の群島）。北極にあるこの諸島は、われわれの感覚世界の果てである。そこを越えると氷だけが延々と続く、単調で抽象的ともいえる世界が広がる。作品の中で使われる、寒さや孤独を象徴する「青色」と、この唯一無比の大地が持つ神秘に立ち向かう強さを持つかのように見える鳥の飛翔や、人間の動きと一致してゆっくりと流れる風景。それらは作品に漂う魅惑的なある種の悲しさと調和している。この境界点を行き来する生物がその場を探求し、知りつくすためには、「境界線の掟」とも言うべきスヴァールバルの掟に従わなければならないのだ。（Daniel Baillon）